

2013年度の国内大会で実施するレギュレーション 一覧表

(公社)日本ホッケー協会 技術委員会 H25.6.12

レギュレーション項目	対象となる大会・試合	実施方法・留意点	備考
グリーンカードを提示された選手に、2分間の退場処分を科す。	高校生以上の11人制大会すべて 6人制及び中学生以下の大会では実施しない。	2分の計測は、当該選手がペナルティボックスに着席した時から開始する。 2分の退場処分中に、試合時間が停止された場合は、退場時間も同時に停止される。 2分が経過した時点が、PC実施中であったなら、その選手の再入場は可能である。ただし、ペナルティコーナーの実施を遅らせることは許されない。 その選手がフル装備のゴールキーパーであった場合には、再入場に際して時間を停止させる必要があるため、競技規則2.3の項にあるゴールキーパーの交代の要件を満たしていなければならない。 ※ 上記、PC実施中の入場制限は、イエローカードの場合も同様となる。	PC実施中であっても、その選手の再入場は可能に変更された。
PCの時、フライングをした選手はセンターラインまで戻る。ただし、PC一回のみセンターラインへ戻ることにする。	11人制大会すべて (中学生11人制を含む) 6人制の大会では実施しない。	フライングした選手は、センターラインまで戻る。 フライングした選手はセンターラインまで戻り、再びPCが実施される。 守備者は； そのPCが終了することなく、再度PCが与えられた場合、その選手はPC守備者としてバックラインに再び戻ることは可能となる。 ただし、PCが開始される前にフライングした場合には、その選手と次にフライングした選手がセンターラインに戻ることになる。 攻撃者は； センターラインに戻った選手以外の他の選手が攻撃に加わることは可能。 そのPCが終了することなく再度PCになった時、再び攻撃に参加することが可能となる。	フライングした選手がセンターラインに戻るの、PC一回のみとすることに変更された。
PC時、攻撃側の球出しをする選手がフェイントをかけた場合は、球出し選手を交代させて、PCアゲインとする。	11人制大会すべて (中学生11人制を含む) 6人制の大会では実施しない。	球出しの反則を犯した選手はセンターラインまで戻る。 代替りの球出し選手は、サークルを囲んでいるものの中から選ぶ。	2012年度と同様、特に変更なし
イエローカード提示による退場時間は、審判によって5分か10分が示されて、ジャッジテーブルに再入場が委ねられる。	高校生以上の11人制大会すべて 6人制及び中学生以下の大会では実施しない。	審判員は、イエローカードを提示した時、ジャッジテーブルに向かって5分か10分を示す。 5分の場合は、手を広げて片手を挙げる。10分の場合は、手を広げて両手を挙げる。 計測方法や再入場の指示等は、グリーンカードの場合と同様にテーブルで行う。	2012年度と同様、特に変更なし
勝敗を決するために行うPS戦に替えて、シュートアウト(SO)戦を行う。	①大学王座 ②全日本社会人 ③全日本学生選手権 ⑤男女全日本選手権 ⑥日本リーグ男子；プレーオフ ⑦日本リーグ女子；順位決定戦 ⑧インターハイ・高校選抜 ⑨国民体育大会	ホッケー競技運営規程に則り、実施する。 8秒のタイム計測は、リザーブ審判員が行い、開始と終了は笛によって知らせる。 1名の審判がSO時の判定をし、別の1名は時間内にゴールラインを通過したかどうかを見る。	SO実施大会に、高校生以上の大会を加えた。
サジェスチョンアンパイアを置いて、チャレンジ権を設ける。	①大学王座の準決勝以上 ②全日本社会人の準決勝以上 ③全日本学生選手権の準決勝以上 ④国民体育大会成年種別準決勝以上 ⑤男女全日本選手権のすべての試合 ⑥日本リーグ男子；プレーオフ ⑦日本リーグ女子；順位決定戦 ⑧インターハイ；準決勝以上で置くが、チャレンジ権は設けない。	左の①～⑦の試合は、サジェスチョンアンパイアを置き、チャレンジ権1回を設ける。 チャレンジした結果、審判の判定が覆らなかった場合、当該試合のチャレンジ権は喪失する。 チャレンジ権を行使したい時は、両手を使ってT字を作り「チャレンジ」とコールする。 チャレンジコールが確認できたら、いずれかの審判が同様のT字シグナルで確認意思を伝える。 チャレンジコールは、フィールド内の選手のみ行うことができる。 インプレイ中にチャレンジを認めても、その間取り等はプレイ中断後とする。 従って、チャレンジ意思確認後試合が継続し、その間得点があったとしても、覆ることもあり得る。 延長戦まではチャレンジ権を認めるが、その後のSO戦やPS戦ではサジェスチョンを置かない。 チャレンジできる内容は、得点・PS・PCに限る。 チャレンジの内容は、反則行為に対してでなく、判定の正否について言及することとする。	インターハイにおいて、準決勝以上にサジェスチョンを置くが、チャレンジ権は与えない。
チャレンジ権を行使したり、PCやPS等得点に関わる抗議があったりして審判が時間を停止した時は、選手交代ができない。	高校生以上の11人制大会すべて 6人制及び中学生以下の大会では実施しない。	選手交代に関して、ジャッジテーブルで管理する。	2012年度と同様、特に変更なし
規則5.1の注釈文章に規定している、試合終了前後の判定の確認や変更については、国内の大会では適用しないこととする。	すべての国内の試合に該当。	規則書25ページの「5.1」注釈文章に関する規則の適用について 前後半の終了合図の前後の審判員の判定を変更することは、原則としてこの規則書にあるような適用は実施しないこととする。 この注釈にある規則は、「ビデオアンパイア」に関するケースを中心に想定されたものであることから、文章通りの解釈で適用することは、運用面でいくつかの課題も発生し混乱をきたすことが予想される。従って、この項の注釈文章については国内では適用しない。	新規追加事項
FH、ヒットイン、センターパスやコーナーにおいて、5m離れていない守備者は、リスタート地点から5m離れた時点で守備に参加できるが、それまでは、プレイにかかわる行為やプレイする意思を示してはならない。また、ボールから離れようとする意思を示していなければならない。	すべての国内の試合で適用する。	FHポイントから5m離れていない守備者が、ボールが5m動くまでの間、守備のための準備をしながらボール移動に合わせて移動していた場合は、離れる意思がなかったとみなして、罰則を与えることとする。 「守備者は、FHの際5m以内に近づいてはならない」ということが優先。そのために、離れようとする意思を行動で示さなければならぬ。	新規追加事項

※ 上記以外の、2013年競技規則にある変更点は、規則書によって十分確認できているとともに、全国ルール統一研修会の内容を各チームに伝達講習したものととして扱うこととする。